

ルール地方の構造改変

— 重工業から観光産業へ —

Sven Holst

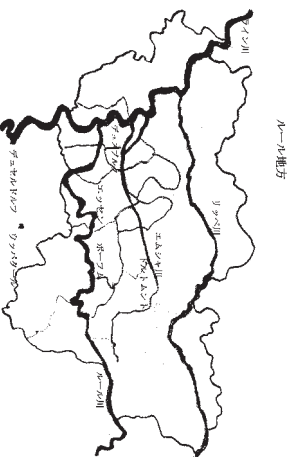
先進国では産業からサービス業への変化が行われており、その変化に合わせてという努力が求められている。また、先の時代の遺産の取扱いが議論されている。福岡県に多数の産業文化遺産が存在する。そこで、同じ問題を抱えているドイツのルール地方の取り組みを調べることで、ヒントを得ることができであろう。

ルール地方の構造変化

ルール地方は、ドイツ西部に位置するノルトライン・ヴェストファーレン州の人口集中地域の一つである。この州の人口は約1,800万人でドイツで最も人口密度が高い州である。ベルギーとオランダに国境を接して、500キロ圏内にはEU人口の40%以上が集中する。またルール地方はライン・ヴェストファーレン工業地帯の一部である。その面積は4,435㎢で、530万人が住んでいる。ルール地方は11の自治体（政令都市と郡）から構成されている。西にライン川、南にルール川、中にエムシヤ川、北にリッペ川が流れている。

18世紀末、この地方はわずかな中級都市と広い農業地帯であった。石炭は13世紀から掘り出されたが、表面に出ただけが採取されていた。

18世紀末から南のルール川で製鉄産業がはじまった。19世紀初めから効率的な採鉱が導入され、1850年までには300ヶ所の炭鉱が生まされた。石炭からコークス製造所でコークスが作られ、ロートリング地方からライン川でルール地域



に運ばれた鉄鉱石の製鉄所で利用された。徐々に、炭層を追って鉱山が北上し、中心はエムンヤ川地域へ移った。その年に新設されたケルンソーミンテン鉄道路線が炭と製鉄を運んだ。最盛期には3,200ヶ所の炭鉱が存在した。新しい産業の労働力が未発展の地域（プロイセン支配下のポーランドなど）から募集された。ルール地方の都市は急成長し、ヨーロッパの第一の工業地帯となった。

1958年から炭鉱危機がはじまった。労働者の賃金がほかの国より高く、鉱山に採鉱し易い炭層がなくなってきたのである。長い間、連邦政府と州政府が補助金でルール地方の採鉱を支え、維持に努めたが、炭鉱や製鉄所が徐々に廃棄されることは止められなかった。こうして失業率が高くなり、都市は荒廃した。現在、ルール地方の北部には6つの炭鉱と3つのコークス製造所しか残っていない。ルール地方は1980年から2002年まで構造変化をしたことにより、100万の職場を失った。このうちサービス業で30万の新しい職場を得たが、大きな失業問題がいまだに存在している。90年代初めからはルール地方の労働力の過半数がサービス産業で働いている。

地 域	失業率
ドイツ	10.5%
ドイツ (西)	8.9%
ドイツ (東)	16.7%
ノルドライン・ヴェストファーレン州	11.5%
エッセン市	15.3%
オーベルハウゼン市	14.2%

資源：Agentur für Arbeit 2006. 6.

ルール地方を離れた人の中でも特に若い技能を持つ人もいるが¹、残っているのは単純・肉体労働しかできない労働者や年寄だけである。その中には外国人労働者や移住民が大きな割合を占めている。この人口層が言語問題と文化差に抑制されたことにより、充分に市民コミュニティが統合されなかったため、都市は更に荒廃した。

採鉱の代わりにルール地方に入った自動車生産業（オペル）や電気機械生産業が、現在問題産業になっている。製鉄及び加工企業であったマネスマン社は90年代はじめに重工企業から情報企業（携帯電話）に転向した。また新設された大学（ボーフム、ドルトムント、デュースブルク、エッセン）に地方の将来が託された。転機の一つの象徴はオーベルハウゼン市の大型ショッピングセンターCentroである。このショッピングセンターは90年代半ばに製鉄所跡地に作られた。2006年までEU（9億ユーロ）と州（9億ユーロ）がこうした構造

変化のプロジェクトを支援する²⁾。

産業文化財保存

19世紀には美術品が伝統文化遺産として美術館に保管され、民衆・大衆文化は無視され、忘れられた。産業革命の成功者が最新の技術を誇らしくみせた。しかし世紀末になると歴史・伝統に対する追憶が沸いてきた。産業建造物には歴史的建築様式が取り入れられた。工場や事務所、豪邸はゴシックの城や中世の町並みに類似してきた。こうした最新の機能と伝統的な建築様式の合併は新しい文化を生んだ。大企業が訓練された労働者を確保するために健康保険の導入のほかに新しい労働者用の住宅街を建てた。そのため、イギリスからゲーデンシティというアイデアを取り入れた。これは新しいニーズに合わせた新しい建築様式の誕生であったともいえる。

1903年、ミュンヘン市にドイツ博物館が設立された。その目的は市民を対象として楽しさを通して教育し、科学と技術への関心を高めることである。1915年にドイツの「技術文化財」の第一号が1907年からのドイツ博物館の轉座により任命された。第一次世界大戦後には機械に込めた技術の保存から、文化的価値がある工場などの保存への転換が行われた。こうした産業建造物は、都市風景の特徴とデザイン性が評価された。1939年に「技術文化史局」が設定された。国家が産業遺産の保護に動いていたためである。戦後、東ドイツでは産業遺産が労働者生活の史料として意識され保存された。しかし、西ドイツでは、経済成長とともに多くの建造物と機械が再開発により失われた。その代わりに特徴やアイデンティティのない実用本位の建物が増えた。

1960年代後半に、イギリスの産業遺産を研究する教育機関が産業革命発祥の地であるアイアンブリッジ (Ironbridge) に設置された。その大学院が産業考古学の先駆となった³⁾。産業遺産の第一国際会議が1973年アイアンブリッジで開催され、第二国際会議が1975年にドイツで行われた。ドイツはイギリスに次いで産業遺産への関心が芽生えてきた⁴⁾。1969年にツォロン炭鉱を壊す予定があったが、建築雑誌でそのユーゲンツェイル様式の建築を絶賛されたため、市民は取り壊しに反対した。そこで州政府がツォロン炭鉱を保存し、現在はヴェストファーレン地方産業博物館の一つの所在地として利用されている。州議会の文化委員会が5年間の「ノルトライン・ヴェストファーレン・プログラム1975」により技術・経済史の象徴的な建造物を保存するために200万DMの補助金を準備した。また文化財保護局が保存価値のある産業文化遺産の目録を作成した。他の州も同じ動きを見せ始めた。ノルトライン・ヴェストファーレン州の文化財保護法 (1980年) は他の州より遅かったが、産業文化遺産に最も広い定義が

含まれた。徐々に産業文化財は都市特徴の象徴として再発見された。70年代終わりからロフトなどとしての再利用が可能になり、また福祉と文化施設もそのような建物を利用してきた。このような産業遺産の建造物は地域アイデンティテイの要素として大事である。しかし住民にとって廃業地域は汚くて辛い仕事や荒廃というイメージがあったので、住民を納得させなければならなかった。

ヴェストフラーレン地域行政連合 (Landschaftsverband) がヴェストフラーレン産業博物館 (1979年) とライオン地方産業博物館 (1984年) を設立した。14ヶ所に分散した博物館で産業時代の技術史、経済史、社会史、労働環境が紹介、記録、研究されている。古い工場が博物館として再利用された。

1989年から1999年まで国際建設博覧会エムシヤ・パーク (IBA) が開催された。エムシヤ川は長い間にルール地方の下木溝として利用された。90年代からエムシヤ協会がエムシヤ川の浄化に努め、川岸などを自然な形に戻している。25億ユーロが地域改変に使われた。炭鉱、コークス製造所、製鉄所の廃業地を産業遺産として保存し、新たな利用方法が探られた。その活動の結果がエムシヤ・ランドシヤツツパーク (エムシヤ川地域公園) である。また、ライオン川沿いのデュースブルク市で元製鉄所がランドシヤツツパーク・デュースブルク北になり、オーベルハウゼン市のガスタンクが展覧会所として再利用されている。その他デュースブルクの川港などの例が数多く存在する。国際建設博覧会エムシヤパークは重工業からサービス産業への構造変化を促進する計画であった。しかし失業率などの変化の随伴現象を和らげる役割は果たせなかった。また自治体の縦割行政問題も解決できなかった。環境にやさしい建築と都市構造への提案、ルール地方のイメージチェンジ、いくつかの高く評価されたプロジェクトは国際建設博覧会の成果であった⁵。現在もたくさんの方がデュースブルク北のランドシヤツツパークを訪れている。しかし維持費が該当の自治体にとって重い負担である。エッセン市にあるツオルフェライン鉱山とコークス炉は2001年に世界文化遺産に認定された。ノルトライン・ヴェストフラーレン州が2000年に「ヨーロッパの共通遺産」のEU委員会によるキャンペーンと合わせて「産業文化の年」を開催した。これは1,000件の催しで、大企業から地方の伝統的な小中企業までの特徴も紹介した。

ドイツには様々な観光街道が存在する。日本で最も有名な「ロマンチック街道」をはじめとして、「メルヘン街道」や「城街道」、「ゲーツェ街道」、各地のワイン街道などがある。その発想から「産業文化のルート」(Route der Industriekultur)が生まれてきた。この街道がルール地方の主な産業遺産物を結び、ルール地方の観光促進の原点になった。400kmの「産業文化ルート」ではルート地方での150年間の産業史が紹介されている。この計画はルール地方自治連合

(RVVR) とノルトライオン・ヴェエストフアーレン州が発案し、1999年までに作りあげられた。25箇所のハブ(本拠地)から25のテマールト(例えば化学とエネルギー、庭と公園)が枝分けされ、54軒の産業文化遺産を結んでいる。途中にはルール地方を見渡す見晴らし地点がある。また、13ヶ所で昔の労働者の住宅街が見られる。自転車でも三つのルートで、合わせて700kmのルール地方の産業遺産を訪ねることができ。ルール地方には数多くの産業博物館・技術博物館(鉱山博物館ボーフム、内陸水運博物館デュースブルク、防災防止博物館トルムント、ライオン地方産業博物館、ヴェエストフアーレン地方産業博物館)が存在する。「産業文化ルート」のスタンプラリーもある。15カ所のスタンプを得たら、絵葉書セットがもらえる⁶⁾。この「産業文化ルート」は好評を得たが、州側は補助金を削減すると予告しているため、将来的に経営が不安定である。「産業文化ルート」の経常費だけは1,200万ユーロにもかかっている。州はノルトシュテルン公園には年間に32.5万ユーロ、ランドシャフツパーク・ノルトには100万ユーロの補助金を出した。しかしオーバーハウゼン市に位置する巨大ガスタンクは拝観料では日常の管理費しか満たさない⁷⁾。

エムシャーパークや産業文化ルートの指導的な立場に立ったのはルール地方自治連合会(RVVR)であった。共同のゴミ収集のほか、人口密度の高いルール地方の緑地を作る役目を果たしている。70年代まで都市計画に権限があったので、緑地保護や改良ができた。それ以降に明地を買い取り、緑地を作った。そのほかには市民のためのレジャー設備も作り、管理している。

「産業文化遺産保護と歴史文化の基金」(Stiftung Industriedenkmalpflege und Geschichtskultur)は1995年に設立された。13人の顧問団、4人の理事、3人の事務員、15人の従業員が産業文化財の保存、記録、研究、公開、伝達、文化財に相応しい再利用に努めている。その中でも主に13の産業遺産の維持を担当している。その維持について様々な意見がある。建物の維持には長い伝統があるが、産業機械の保護はより大きな問題である。例えば、外の配管などが早く錆びていること、中に有害物質が残っている可能性もあること、建て直しの資金がないことなどである。ほとんど手入れをせずに腐朽させるか、昔の産業プロセスの独特な部分だけを残すかは完全な取り壊しに比べるといい選択である。なお、ルール地方の産業文化財のネットワークはドイツとヨーロッパの手本である。デュースブルク市に本拠地を構える「ドイツ産業文化協会」(Deutsche Gesellschaft für Industriekultur)⁸⁾がヨーロッパの「産業文化ルート」を計画しているところである。文化財保存では20年代30年代の建物を保存するが、50年代の建物は保存しない。地域の象徴であったガスタンクが壊された。「産業文化遺産保護と歴史文化基金」がそのガスタンクを維持するように運動を

起こした。しかしガスタングは文化財として登録されなかったので、「産業文化遺産保護と歴史文化基金」はそれを受け取ることができなかった。基本の改修費は120万ユーロであったが、採算がとれる再利用計画を設計できなかったのである。

ルール地方には昔の産業建造物しかないというわけではない。ポットロフ市内の Movie Park のようなレジャーセンターも生まれてきた。その他に美術館・博物館200軒（エッセン市のフォルクワング美術館等）、劇場8軒（エッセン市等）、コンサートとオペラホール4軒（エッセン市等）など、様々なフェスティバルがある。その文化密度がゆえ、エッセン市が代表を勤め、ルール地方は2010年のヨーロッパ文化首都に申請され、認定された。それに合わせて2010年までの3年間にエムシヤランドシヤフツパークで行われた20件のプロジェクトには4,800万ユーロ以上（州1,200万ユーロ、地方自治連合1,200万ユーロ、連邦政府900万ユーロ、“ルール地方運動”850万ユーロ、エッセン市50万ユーロ、企業からの援助1,200万ユーロ）がルール地方改新のために導入されている¹⁰。2005年に現れたルール地方産業文化遺産維持の財政危機がヨーロッパ文化首都任命により2010年までに回避できるであろう。

ルール地方は元々文化的な気質に縁がない地域であった。わずかな産業革命以前の文化遺産、エッセンの大聖堂の宝物やハットテインゲンという昔の町並みのみが残っている。大企業家の文化とそれを敵視する労働者の地域であり、エッセン市の南に位置する丘陵地帯には鉄王のクルツァ家の大邸宅があった。大企業家の19世紀と20世紀の美術収集により、いくつもの名コルクシヨンが生まれた。エッセン市にはフォルクワング美術館が設立され、クルツァ家の邸宅がしばしばコンサートと展示スペースとして利用されていた。1927年にダンスと音楽のフォルクワング学校が設立され、有名な卒業生を数多く送り出した。第二次世界戦争直後、ハンブルグ市の劇場俳優が燃料を得るためにルール地方に来て、石炭と芸術を交換した。1946年からは労働者芸術祭典であるレックライングハウゼン市「ルールフエステイバル」が生まれ、ルール地方の新しい文化のイメージが普及しはじめた。2002年からこのフエステイバルは全ルール地方に及ぶ三年間の「ルールトリオナーレ」に統一された。観客の1/5がほかの州や外国からの旅行客である。この文化祭典は基本的に地元住民のためのイベントであり、観光促進の相乗効果がある。

観光振興の一つの問題は自治体の縦割行政である。多数の政治団体（自治体）が口を揃えたら、マウテイング的な理論に基づいた観光振興政策が少なくなってしまう。他の問題は、首尾一貫していない行動、市場判断の誤り、追加された役割のための資金不足、不正な大型プロジェクト、補助金の浪費、許可、

プロジェクトに対する反対の動きなどである。これらの問題を解決するために、1998年4月にルール地方観光有限会社 (RTG) が設立された。その目的は新計画を束ね、マーケティングや販売をし、ルール地方の独自のイメージを創作することである。各自治体の様々な観光振興計画を束ねることにより、効果的なルール地方観光促進が期待される。提供するサービスと活動は、ルール地方観光のブランド化、テーマを絞った観光振興、質の向上、調査及びマーケティングと販売の支持、基本分野 (都市観光、文化観光、スポーツ観光、レジャー観光、ビジネス、会議・見本市) についての計画と支持、情報交換ネットワーク設立、自治体と業者の相談、ノルトライン・ヴェストファーレン州に対する代弁活動である。ルール地方観光有限会社 (RTG) が宿泊、ツアー、切符の予約、ペンフレットを発行したり、ガイドブックを販売したり、ルール・トゥング・カード (33ユーロのカードで120ヶ所の文化施設やアトラクションを無料・割引に使うことができる) を発行したりする。実現した計画は「残業・産業文化の夜」、「水ナスポーツのルール地方」、「ルールトゥングカード」、「ルール川サイクリングコース」である。ルール地方観光有限会社 (RTG) が提案した1つのプロジェクトは“Extraschicht” (残業) という産業遺産の中の文化イベントのタペである。2001年に初めて開催され、6月の一日の夜18時から2時まで19の自治体の39ヶ所で120のイベント (コンサート・芝居・パワーマシンなど) が行われた。5つのハブから公共交通公社の100台以上の臨時バスや臨時列車で、すべての会場に往行できる交通システムが作られた。また、150—200人の案内人が交通と番組のアドバイスをした。10万—14万人の客 (当日券14ユーロ) が来場した。ライナーレとして5つのハブで花火が打ち上げられるなどで終了した¹¹。

他の成功例は230kmのルール川谷の自転車道である。2006年に隣接する観光協会と協力してわかりやすい道標を立てて、ルール川の源から河口までの自然と産業文化を通る平坦な自転車道を作った。カッツルや小人数のグループのほかに家族もこの道を利用している。利用者の数は把握しにくい¹²が、3ヶ月に3万人3万弱、ピークのときには、一日に1,500人が途中の渡し舟を利用し、自転車道のガイドブック2万冊が売れた。自転車道沿線のレストランや宿泊施設の販売り上げは30%に伸びた¹²。

ノルトライン・ヴェストファーレン州のレベルで、1997年に設立されたノルトライン・ヴェストファーレン州観光協会 (Nordrhein-Westfalen Tourismus e.V.) は観光振興に努め、相談、アドバイス、各計画の調整、行政や観光にかかわる組織に対する代弁、マーケティング調査、各地方の共通のインターネットの登場、職業訓練の透明化を進めている。7人の理事の下に11人の従業員が働いている。53の組織 (州政府、自治体、自動車連盟、空港、旅行代理店等) が

協会に入会した。2004年はノルトライオン・ヴェストフラーレン州観光にとって、統計に把握された1,550万人の乗客、3,770万の宿泊で最高記録となった。その中でも外国人旅行者(すべての客の18%)による670万回の宿泊、9.1%の増加が重要な割合を占めている。宿泊客にとっては、ノルトライオン・ヴェストフラーレン州はバイエルン州(宿泊客数2,380万人、宿泊回数7,350万泊)とバーデン・ヴェルテンベルク州(宿泊回数4,000万泊)に次いで、第二(宿泊客数)第三(宿泊回数)のドイツの観光目的地である。宿泊客数と宿泊回数の差にノルトライオン・ヴェストフラーレン州の観光の特徴が見られる。重要な産業地域の商用旅行者¹³や都市ツーリズムの観光客は長期間滞在せず、山と海の休養客が長期滞在する。ノルトライオン・ヴェストフラーレン州内に、ルール地方が21.4万人で二位のケルン(21.3万人)を抑え、宿泊回数においてもルール地方が自然豊かな二つの山脈地帯に次いで、三位に並んでいる。ここでも上に述べた休養地帯と都市観光の差が見られる¹⁴。

2004年の観光発展

	宿泊客数	去年からの 変化	宿泊回数	去年からの 変化
ルール地方	2,144,400 (13.8%)	+5.8%	4,253,803 (11.3%)	+7.3%
ノルトライオン・ヴェストフラーレン州	15,505,616	+6.3%	37,690,205	+3%

資源：Nordrhein-Westfalen Tourismus e.V.：„Jahresbericht 2005“

観光産業は24万人の職場と110億ユーロの売り上げで、州の重要な産業分野である。

小結

ドイツの観光市場が悪化している。これは国内旅行の人气が衰えているためである。都市観光だけがまだ成長している。それ故、ホテルの利用率が低下している。地方間・ホテル間の競争が激しくなっている。観光客が経験を積んだため、サービースと値段、観光地・アトラクションについての意識が高まった。産業観光の対象者は休暇観光と違う行動パターンをみせる。滞在期間がより短く、目的はストレス解消やくつろぎではなくて、娯楽である。産業文化財は、「相互作用(対話式)の体験の世界」として宣伝されており、大イベントにより、ヨーロッパ¹⁵から観光客が地方を訪れる。産業観光促進の動機は、収入源のほかに地方のアイデンティティを振興することである。内外を問わず意識改変し

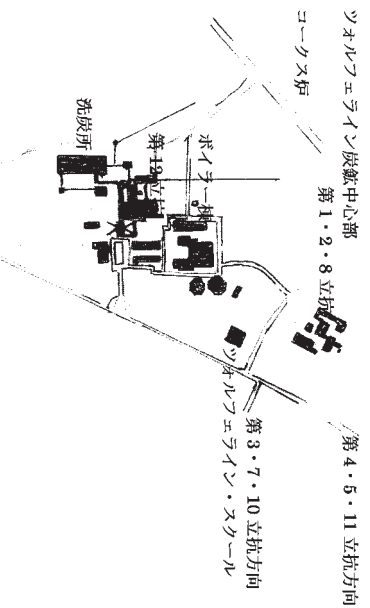
なければいけない。内向きにはアイデンティティと産業文化財に対する意識を向上させ、外向きにはイメージを変えなければならぬ。国際建設博覧会エムシヤパークが話題になり、イメージの変化を意識させる役割を果たした。昔から一つの地方として認識されていたので、観光振興製作も地方のレベルで行わないと効果がみられない。そのために「産業文化ルート」のようなネットワークも必要である。そのネットワークの中で独自の活動と共同のマーケティングが可能になった。観光による地方開発ではまず地方と企業（ホテルなど）にコスト・動力が投資されなければならぬ。長期的な成功のためには、予約制度、協力パートナーなどの整ったシステムが必要であり、それがなければ、観光市場では生き残れない。様々な政策により、ルール地方を訪れる人数と宿泊者数が増えている。ルール地方観光が消費者の意識に定着したと考えていい。ルール地方のイメージが変わり、ルール地方という建設的なブランドが定着したのである。しかし観光産業は流動性が高く、特に都市観光の市場では国内外の都市同士の競争合いが激しい。イベントや展覧会で消費者が関心を持ち続けられるような努力が常に必要である。

しかし、多くの公的な投資にもかかわらず、構造変化の問題（特に失業率）は解消されていない。昔の生産産業からサービス産業に変化しても、同じ数や質の職場を確保するのは困難である。

世界文化遺産ツォルンエライン炭鉱の例

ツォルンエライン¹⁵炭鉱は1847年に創業された。同じ時、ケルン・ミンテン鉄道がツォルンエライン炭鉱周辺に開通した。1851年に初めての炭が114mから運び出された。1920年代に4つの炭坑が使われた。それを改造することにより、

それを鉱山労働者の入り口として使った。炭を運び出すために新しく能率の良い第12立坑を作る決断がされた。この第12立坑は、それまで分散していたエッセン市内の炭坑施設を統合させたものである。バウハウスの影響を受けたこの建



物は、Fritz Schupp と Martin Kremmer という若い建築家が建設した。機能と美的側面を合成して建造され、建築物としての評価も極めて高い。炭坑は1932年に操業を開始した。当時最も能率のよい炭坑であった。ここから毎日1万2千トンの石炭が採掘されたが、これはヨーロッパの同規模の炭鉱の3倍の採掘量だった。炭鉱の隣(300m)にはコークス炉が作られた。その後炭坑は1986年に廃業した。コークス炉は1993年にその役目を終えた。

州開発公社 (LEG) が保存と再利用を目的としてツォルフェライン炭坑を150万 DM で購入し、改修した。州開発公社は州の代わりに廃業の土地を購入し、投資と計画をして復旧と再開発に努めている。州開発公社は100,000軒の公共住宅を提供し、休耕地を開発する他、住宅や営業物件を建設し、販売している。1,000人の従業員で2004年に5.53億ユーロを売り上げた。1.5億ユーロ資金の66%は州から、22.2%は州の銀行から提供された。州開発公社所有の第12立坑に隣接するほかの土地は、元の所有者であるルール株式会社 (RAG) が自分の不動産会社 MGG を通して、ツォルフェライン総合的基本計画に合わせて、それに賛同する買い手に売りさばいた。

90年代からは、デザイン、芸術、文化などの企業が建物群に入居した。ボイラー棟は1997年に有名なイギリス建築家ノーマン・フォスターにより改造された。ノルトライン・ヴェストフアレーン州のデザインセンターが入居し、現在はデザインセンターの博物館である “red dot museum” となっている。1954年にドイツ企業界からの発案により、クルツ家の支援で「インダストリアル・フォーラム協会」が創業され、次年から優れたデザインを表彰し（インダストリアル・フォーラム賞）、表彰されたデザイン品を常に展示してきた。1990年にノルトライン・ヴェストフアレーン・デザインセンターに改称され、デザイン促進のほかにも、経済・政治・文化の交流、国際情報交換と向上、企業へのアドバイスを目指している。EU と協力し、東京とシンガポールに事務所を構え、アジア諸国で展示会を開いている。1993年からコミュニケーション・デザイン賞を授与している。現在、プロダクト・デザイン賞とコミュニケーション・デザイン賞という二つの賞が、red dot award という一つのコンペに合併された。ここは業界の評判が高く、宣伝効果も高い。博物館になったボイラー棟の4,000㎡の展示スペースに1,000個の展示物が展示されている。いわば世界最大のデザイン展示会なのである。

旧ツォルフェライン炭鉱は6,130万ユーロを投じて世界的に意義あるデザイン及び文化科学の拠点に改築されている。EU 地域政策担当委員はノルトライン・ヴェストフアレーン州の申請を許可し、ルール地方はヨーロッパ構造基金から資金援助を受けられることになった。総費用のうち EU が半分の3,060万

ユーロ、ノルトライオン・ヴェストフアレーン州が1,840万ユーロ、エッセン市が1,230万ユーロを支出する。ガイド付きの観光ツアーや娯楽施設までもが完備されている。

2000年、審議延期保全計画をとまった管理計画を用意するなど、いくつかの問題点が指摘されている。2001年にツォルフエライオン炭鉱が世界遺産登録された。世界文化遺産の認定を受け、2001年の夏にツォルフエライオンの発展と開発を統括するためにツォルフエライオン発展社 (EGZ) が設立された。ツォルフエライオン発展社 (EGZ) 監事会長は州の建設大臣である。2002年、オランダ建築家 Rem Koolhaas が総合的基本計画を提案し、総合デイスインと文化センターに変身させると提案した。ツォルフエライオン炭鉱が世界的に意義あるデザイン拠点として、EU 委員会は州の申請を2002年3月に許可した。2006年までに4つのプロジェクト (デイスイン博覧会 ENTURY 2006、ツォルフエライオン・デイスインと経営学校 ツォルフエライオンスクール)、デイスイン企業エリア、ルール博物館) の財政的な必要条件是、確立された。3,000万ユーロの EU の共同資金提供を確保した。7,200万ユーロが州の補助金であり、エッセン市はおよそ800万ユーロを投資した。この資金で、ツォルフエライオンは基盤保存と公的な空間を再編成する。州は、このプロジェクトによりルール地方におけるデザイン分野の中小企業を呼び寄せ、育成及び支援をし、産業の新分野にある中小企業の競争力を高めるつもりである。2003年にプロジェクトの遅れなどの EGZ に対する批判が高まった。幹事長の更迭のほかに指導委員会が設立された。ツォルフエライオンにかかわっている組織が指導委員になり、ツォルフエライオンと諸関係者の直接的な意見提出やネットワークを促進する。

デザインと経営学校が2004年後期から授業を開始した。この大学院では企業 (将来の) 首脳部である社会人が、英語で経営とデザインの関係や関連問題解決について教わる。また2006年7月には日本人の建築チームが設計した学校の新館ができあがった。

洗炭所の中が2003年6月から2005年5月までに完全に改造された。20人の元失業者が短期間雇われ、訓練され、数人が後に安定した仕事に着いた。飲食店として、接客センターの喫茶店と洗炭所屋上の400人収容の会議場がある。経営者と州開発公社 (LEG) が長期間契約し、開業は ENTURY2006 の開催 8月26日に合わせて行われた。ENTURY2006終了後、ルール博物館がその新しくできた展示スペースに入る。建物になった機械と言われているこの建造物はある機械や技術の保存の役割はもう果たせないが、これからルール地方の総合「記憶」の役割を果たすであろう。

「フオーラム女性とツォルフエライオン」の目的は各プロジェクトのジエン

ダー・メーンストリーミングである。各プロジェクトとは計画の段階から男女平等社会参画にあっているかどうかをチェックする顧問機関である。EUの補助金をえるためにこのような顧問機関の設置が要求されていた。

1990年には、ルール株式会社の教育部門により、資格センターがツォルフエラインで創業された。このセンターでは、仕事をしながら職業関連の教育（ITや技能、言語）を行う。2005年にツォルフエラインの総合計画に合わせて、技術プロダクト・テイサイナーの職業訓練のコースが提供されてきた。

第1/2/8立抗着替・シヤワー棟に2000年からリニエーアールしたダンス・振り付けセンターpactが入った。振付師やダンス・グループに対し、稽古場のほかに技術的、組織的、事務的なアドバイスを提供する。月に約9回の公演が行われる。資金は州とエツセン市が共同融資している。

第12立抗のホール12号には「ARKA文化作業場」が入っている。1977年に設立した芸術教育者、画家、グラフィック・アーティストの協会が1994年にツォルフエラインに移り、展覧会の開催のほかに芸術のコース（2006年春夏に22のコース）を提供し、芸術出版社を営んでいる。

ツォルフエライン・ツーリズムは近くのペンションを案内し、炭鉱の土産や本、CDを販売し、地方の料理を提供している。また元炭鉱労働者の案内による町散歩、自転車ツアーを提供する。ツォルフエライン周辺のエツセン市北部の市民により観光事業開発が行われ、エツセン市北部の経済発展を繋いでいる。この周辺住民の活動は、ほとんど行政・専門家指導に行っているツォルフエライン改変にとって重要な住民参加である。

毎年50万人がツォルフエラインを訪れる。6万人が炭鉱のツアーに参加する。来場者アンケートによると6%は外国から、12%は他の州から、20%はルール地方以外のノルトライン・ヴェストファーレン州から、32%はエツセン市以外のルール地方、30%はエツセン市内から訪れている。観光客の50%弱は初めてきたと回答し、88%はまた来たいと答えている。また他所から来場した人々の40%はツォルフエラインのためだけにきた、60%は他に訪れるところもあったと回答している。31%は産業自然、30%は文化と教育、28%は一般関心、7%は特別な催しのためにきており、建築や炭鉱への興味が多いが、重点であるデザインはまだほとんど意識されていない。ガイドとred dot design museumが好評を博している。訪問者の66%は第12立抗を訪れ、41%は第12立抗だけに行く。25%はコークス炉に、15%は第3・7・10立抗に、7%は第1・2・8立抗を訪れている。また、訪問者の44%は新聞の記事から、36%が親戚や友人から、9%がインターネットから、10%が「産業文化ルート」関連から情報を得

ていた¹⁶。

第12立抗から約1,000m西に第3・7・10立抗の敷地(3.5ha)が存在している。国際建設博覧会IBAの一角として、この敷地が市民と職人ノブークに改変された。古い産業建造物と新しい建物に5つの小中企業が入り、老人ホームや保育園で70人が新しい仕事を得た。古いコンペヤーハウスには五感を体験できる展覧会(年に5万人の来客)が入り、隣接する古い建物には障害者も働く喫茶店がある。25万ユーロの投資(公的と私的)で200人の職場が確保ができた¹⁷。

第12立抗から北方約1,600mに第4・5・11立抗が位置している。1997年から2002年までその建造物が改造され、新しく設立された企業のスペースとなった。30㎡の事務所から200㎡の作業場と倉庫までがある。ツォルフエライオン将来センター“Zukunftszentrum Zollverein”(通称“TripleZ)が1996年に創業した。将来センターは開業者に法・税・経営の広い分野でアドバイスを提供する。また商用関係作りにも関わっている。公的資金と私的な援助が株という形でセンターを支えているため1998年から赤字になった。倒産のケースもあつたが、全体的に人気のある企画である。様々な分野からの70件の企業と500の職場が作られた¹⁸。州政府からモデル・プロジェクトとして表彰された。将来センターで育て上げた企業、いわば卒業生のために、隣接する新しい営業団地を開拓する企画がある。しかし、そこに根を下ろした小中企業を調べたところ¹⁹、生産業が少なく、地元住民と行政のためのサービス業を行う企業が多いので、経済活動の基盤はまだ弱いであろう。

ネットワーキング

ツォルフエライオンには、大きく分けると三つのネットワークが存在する。

一つ目はツォルフエライオン内部の同居者や顧問たちのネットワークである。ツォルフエライオンにはデザイン・文化・経済といった様々な分野の人材がいるので、そのノウハウを合わせることで、新しい発想が期待できる。ツォルフエライオン開発協会(BGZ)の指導委員会ではプロジェクトルール有限公司(ルール地方再発展目的の組織)、エッセン市の経済発展促進有限公司、州開発社、エッセン市、ルール博物館、ツォルフエライオンデザインと経営学校、州の建設・住宅・文化・スポーツ省、カジノ・ツォルフエライオン(飲食店)、エッセン見本市有限公司、ダンスと振付センターPact、ツォルフエライオン展示有限公司(ENTRY 2006)、産業遺産と歴史文化基金、ツォルフエライオン基金、不動産業者(産業遺産の建造物を販売)、NRWデザインセンター、エッセン市の文化局、文化坑ツォルフエライオン、ツォルフエライオン開発社、州の経済・労働省、ルール自治連合会の代表が委員として勤めているので、組織化されたネット

ワークそのものである。TripleZという将来センターでもネットワークが活動している。2005年から、ツオルフエライン関連企業のために business breakfast と呼ばれている集会を催し、様々な分野の企業（150企業と組織、1,000人以上の従業員）の交流により、新たな経済活動を促進している。

二つ目のネットワークはエッセン市の文化ネットワークである。エッセン市内の路面電車107番線（文化線とも呼ばれている）が17kmの沿線で60ヶ所の文化施設（博物館やオペラ座、教会）を結んでいる。107号線は北のツオルフエラインから南のクルップ家の豪邸まで走っている。エッセン市はその文化的な活動により、2010年のヨーロッパ文化首都に任命された。2003年12月からツオルフエライン関係者と地域の議員が月に一回の「土曜会」に集まり、意見交換をしている。それまでには地域の意見（補助金の使い方）や要望（特に経済促進）が十分に配慮されていなかったという批判があった。

三つ目は全ルール地方に及ぶ「産業文化ルート」である。すでに紹介した「ルールトリオナーレ」は芸術の全ルール地方に及ぶコーディネートされた芸術のネットワークである。ルール地方観光有限会社（RTG）による共通のイメージを作り上げ、ルール地方の宣伝に力を入れている。

1軒の産業文化遺産では地域経済振興ほどの引力がほとんどないので、ネットワークを作ること、その相乗効果に期待ができる。

終わりに変えて

ルール地方構造変化とツオルフエライン炭鉱を観光学的な立場から見て、どのように評価できるのか。観光要因「モノ」・「コト」・「ヒト」²⁰のうち、「モノ」はツオルフエライン炭鉱、「コト」は見学ツアー、イベントのタペ Extraricht などの強みがあるが、「ヒト」という面だけ強みがない。元炭鉱労働者による特別なツアーや料理教室しか提供されていない。例えば地元住民の料理を試食できる、民宿に泊まることなどできることなどである。ツオルフエラインは五感を刺激しているのであろうか。大きな圧倒する産業遺産物を見ることができ、多少その機械を触ることもできる。最近、食事の面に設備が強化された。しかし機械が動いていないので音もしないし、臭いという刺激もしない。その意味で実感という刺激、大工場の雰囲気がいし足りないであろう。

観光振興の主体は地元住民、自治体、観光連合団体、観光企業といわれている。ルール地方とツオルフエラインの観光は実際に行政や第三セクターの会社が実施している。本来の住民の活動が少なかったが、ツオルフエラインで芽生え始めた。観光振興方法は観光地開発、観光イベント開催、特産品開発であるといわれている²¹。ルール地方の観光地開発と観光イベント開催は多様に行わ

れていたため、高く評価できる。しかし特産品開発が遅れ、今でもルール地方の土産は思い浮かんでこない。ドイツでは日本ほど土産を重視されないが、例として観光に伝統のあるバイエルン州などのほかに、ルール地方と同じノルトライン・ヴェストファーレン州のボン市のロゴ商品とベートーベン商品がある。以上のようにツォルフェライオン炭鉱は4つの機能を果たしている。

1) ルール地方のアイゼンテイルを確保すること。モノ(産業遺産)が残っているが、アイゼンテイル変化が起こっている。労働者の日常への記憶が遠ざかるに連れて「博物館化」や「エクゾチック化」(異文化叙情)されている。逆に芸術というモチーフ(博物館・ダンス・映画)が前面にでており、その要は建造物の高度なデザイン性である。しかしデザインセンター化により、産業発展の資料としての価値が減った。例えば洗炭所の中の機械が捨てられ、元の機能が見えなくなり、ただの建前として残っている。遺産保護家とユネスコはこの展開を厳しく批判している²²。

2) 観光客を呼び寄せること。確かにその役目を果たしているが、世界文化遺産ほどの引力ではなく、200キロ圏内の来客が最も多い。そのため例えば日本のドイツガイドブックには載っていない。

3) 経済発展のエンジン：観光振興は、観光産業のほかに、第一次産業、地場産業、商業に幅広く経済波及効果をもたらすと期待されている。観光(ツォルフェライオン)とその副作用(隣接する観光施設や店、レストラン、民宿、ガソリンスタンド)効果のほかに、デザインという新しく、ほかの産業分野にも影響及ぼしそうな産業を操業する試みである。デザイン(博物館・学校)、芸術(PACTやARKA)、企業(RAG,デザインシユダット・ツォルフェライオン、学校、TripleZ)の連携により、新しく斬新な発想が期待できる。しかしこれが経済的な成功と繋がるかどうかは、まだ確定できない。

今年(2006年)までは高格の資金で整備・準備の時間であった。これから経済振興に支援が少ない状態²³で独立した運営ができるかどうかはまだ示されていない。

4) 地域のコミュニティのための設備：実際地元へのヒトはよく訪れており、文化的な設備を利用している。

各役割に今まで多くの税金が使われている。また、3)以外の目的(産業遺産保存、運営)にこれからも公的援助を必要とする。観光や文化設備の利用からの収入ではそれを補うことができない。行政は産業遺産の維持と再開発の相乗効果に期待をよせている。魅力的な文化設備であり、世界産業文化遺産であるツォルフェライオンの「デザイン」というイメージによって、デザイン産業が発達すると期待されている。その効果により、すべての産業が発展し、地域発

展に貢献し、産業文化遺産の保護のコストも間接的に補うことができる。その思惑が実現するかどうかは将来に示されなければならぬ。

世界文化遺産ツォルフエライオン炭鉱を訪ねる大勢の人々が満足している。炭鉱の基本の部分が保存され、公開された。ほかの部分が再開発のために部分的に解体され、大幅に変化した。ツォルフエライオン炭鉱は金融面では効率的であるか。文化遺産を文化遺産として継続的に残すのはコストがかかる²³。再開発により、文化遺産としての価値が下がる。公的予算が縮小している現在、文化遺産の維持と再生のパラドクスをとらなければならぬ。持続的な発展の軌道に乗っているかにみえるが、公的融資が減れば、困難が待ち受けている。

産業遺産開発はルール地方の経済構造変化に役立った。1,000人が再びツォルフエライオンで働き、近い将来にツォルフエライオンでの職場が増える見込みがある。創造能力豊かな若いオーナーの小企業で成功と失敗の可能性は隣り合わせである。現場以外に経済効果もあるが、他所から新たな力を引き付ける引力はまだ弱い。また、失業問題に特に苦しんでいる教育レベルの低い社会層への影響が小さい。今に設立された小企業が成長し大企業が入る時だけ、単純労働の需要が高まり、失業問題が軽減されることになるであろう。

注

- 1 2015年の人口査定は503万人である。これは現在より25万人の減少、1970年と比べるとより60万人の減少に値する。Breitschneider, Frank: „Das Ruhrgebiet im Umbruch“ 2006, 8. Presseinformation Regionalverband Ruhr
- 2 Schreven, David: „So hilft Europa beim Strukturwandel in NRW“ Welt am Sonntag 2005.10.2.
- 3 加藤康子：「旅行者により興味深く見せるために（海外事例に学ぶ資源の見せ方）」月刊観光 2004年10月
- 4 トイツ語の表現“Industriekultur”（産業文化）は産業考古学（英：industrial archaeology）や産業遺産保護とは異なり、その歴史・現在・将来を調べることを指す範囲の広い表現である。Ebert, Wolfgang: “Beispiele—Modelle—Strategien” <http://www.indukult-vereine.de/Ebert.html>
- 5 Müller Sebastian: “Transformationslabor Internationale Bauausstellung Emscher Park 1989-1999 Gutachten für die Stiftung Bauhaus Dessau” 2001.2.10
- 6 Lange, Dettlef: „Route Industriekultur Entdeckerpass“ Regionalverband Ruhr 2005
- 7 Schreven, David: „Die Finanzierung der Ruhrgebiets-Denkmläer ist ungewiß“ Welt am Sonntag 2005.11.20.
- 8 ノルトライン・ヴェストファーレン州には350の産業文化にかかわる協会が存在する、

- ドイツ全国で800の協会がある。多様で活発な活動であるが、若い世代の参加者や個人側からの支援・寄付が少ない。ドイツ人は、文化支援は行政の役目と考えている。
- Ebert, Wolfgang: “Beispiele-Modelle-Strategien” <http://www.indukult-vereine.de/Ebert.html>
- 9 Presseinformation 2005.12.17
 - 10 „Wandel durch Kultur im Ruhrgebiet“ Welt am Sonntag 2006.4.16
 - 11 <http://www.extraschicht.de>
 - 12 <http://www.ruhrtrahradweg.de>
- 以前からトーナウ川自転車道が存在し、人気を得ていた。
- 13 ルール地方の宿泊客の2/3は商用旅行者である。Bretschneider, Frank: „Pressenformation“ 2006.8. Regionalverband Ruhr
 - 14 Nordrhein-Westfalen Tourismus e.V.: „Jahresbericht 2005“
 - 15 Zeche Zollverein 日本語に訳すと閩税同盟炭鉱である。設立当時にドイツ諸国間の閩税同盟の成立を祝して、命名された。
 - 16 westwerk GmbH, RVR: Zollverein Besucherbefragung 2005
 - 17 Agenda21 NRW Best Practice Beispiele-Theme Nachhaltiges Wirtschaften, 2-3 ページ
 - 18 Siselbeck, Kai: “Ein Star aus dem Norden” WAZ 2006.07.21
 - 19 <http://www.triple-z.de/firmen/firmenlistetab.php>
 - 20 例えば：山上徹：「観光の京都論」学文社 2002年 7ページ
 - 21 長谷政弘：「新しい観光振興」同文館出版 2003年 9ページ
 - 22 Bernieder, Irmgard: „Die Unesco droht der Essener Zeche Zollverein mit der Roten Liste“, Rheinischer Merkur. <http://www.untertage.com/cms/content/view/103>
 - 23 ツォルフエライオン発展会社の局長によると、公的融資なしに20軒の保護された建物を維持することができないそうである。Weiss, Roland: “Es muss eine Spitze geben”, NRZ 2006.08.30

参考文献

- 加藤康子：「旅行者により興味深く見せるために（海外事例に学ぶ資源の見せ方）」月刊観光 2004年10月
- 山上徹：「観光の京都論」学文社 2002年
- 矢作弘：「産業遺産とまちづくり」学芸出版社2004年
- Agenda21 NRW Best Practice Beispiele -Thema Nachhaltiges Wirtschaften
- Bernieder, Irmgard: „Die Unesco droht der Essener Zeche Zollverein mit der Roten Liste“/Rheinischer Merkur. <http://www.untertage.com/cms/content/view/103>
- Bretschneider, Frank: „Das Ruhrgebiet im Umbruch-Strukturwandel einer Region“

2006. 8. Regionalverband Ruhr
Ebert, Wolfgang: „Beispiele-Modelle-Strategien“ <http://www.indukult-vereine.de/Ebert.html>
- Heinze, Rolf u.a.: „Bevölkerungsentwicklung und Arbeitsmarkt im Ruhrgebiet“ Projekt Ruhr 2002. 12.
- Lange, Detlef: „Route Industriekultur Entdeckerpass“ Regionalverband Ruhr 2005
- Levermann, Frank: „Aus KVR wird RVR“ 2004. 10. Regionalverband Ruhr
- Müller, Kirsten: „Zelle Zollverein Schacht XII in Essen“ Deutscher Kunstverlag München 2001
- Müller, Sebastian: „Transformationslabor Internationale Bauausstellung Emischer Park 1989-1999 Gutachten für die Stiftung Bauhaus Dessau“ 2001. 2. 10
- Nordrhein-Westfalen Tourismus e.V.: „Jahresbericht 2005“
- Süsselbeck, Kai: „Ein Star aus dem Norden“ WAZ 2006. 07. 21
- Schreien, David: „Die Finanzierung der Ruhrgebiets-Denkmläer ist ungewiß“ Welt am Sonntag 2005. 11. 20.
- Schreien, David: „So hilft Europa beim Strukturwandel in NRW“ Welt am Sonntag 2005. 10. 2.
- „Wandel durch Kultur im Ruhrgebiet“ Welt am Sonntag 2006. 4. 16
- Weiss, Roland: „Es muss eine Spitze geben“, NRZ 2006. 08. 30
- westwek GmbH, RVR: Zollverein Besucherbefragung 2005
- http://www.arbeitsagentur.de/mn_241350/Navigation?Dienststellen/RD-NRW/Essen/Zahlen-Daten-Fakten/Arbeitsmarktberichte
- <http://www.casino.zollverein.de>
- http://www.essen.de/deutsch/Wirtschaft/Creative_Village.asp
- <http://www.extraschicht.de>
- <http://www.industriekultur.de>
- <http://www.leg.nrw.de>
- <http://www.ragbildung.de>
- <http://www.route-industriekultur.de>
- <http://www.ruhrfestspiele.de>
- <http://www.ruhrtrahadweg.de>
- <http://www.rvr-online.de/freizeit/marketing/bindata/GES2.PDF>
- <http://www.triple-z.de/firmen/firmenlistetab.php>
- <http://www.zech-zollverein.de/>
- <http://www.zollverein.de>